

## 「女性の健康からみた

# 母子保健のあり方に関する研究」

東京大学

分担協力者 武 谷 雄 二

【要約】妊娠・分娩・産褥における生理学的及び病理学的な身体上的変化は、女性の生涯にわたる健康と密接な関連を有することが様々な事実により推察される。本研究の目的は、妊娠・分娩の経験の有無や妊娠・分娩時にみられた異常が女性の各ライフステージにおける健康とどのような関連を有するかを解明することである。そこで、(1)思春期における各種障害、(2)虚血性心疾患・腎疾患を代表とする成人病、(3)尿失禁・腰痛症・子宮脱などの中高年期の好発疾患がそれぞれ妊娠・分娩・産褥とどのような関連を有するかをレトロスペクティブな視点から明らかにすることとした。

昨年度は(1)思春期障害と妊娠・分娩・産褥との関連を検討するため、産褥婦人を対象とした思春期障害に関するアンケート調査と、思春期外来患者を対象とした妊娠分娩産褥に関するアンケート調査を計画し、調査形式の設定及び質問用紙の作成を行った。

(2)成人病と妊娠・分娩・産褥との関連を検討するため、二つの対象群、即ち、成人病を発症し入院治療を受けた女性患者と保健所において実施される成人病健診受診女性、とに対する妊娠分娩歴に関するアンケート調査を計画した。急性心筋梗塞にて入院治療した女性患者を対象としてアンケート調査を行い、急性心筋梗塞患者の産科合併症としては妊娠中毒症・流産・早産・巨大児等が認められ、特に子宮内胎児発育不全は高率であった。また、保健所で行われている成人病検査の実態を調査し、アンケート調査の対象とその様式に関する方針を決定し、アンケート用紙の作成を行った。(3)尿失禁と妊娠・分娩・産褥との関連を検討するために、腹圧性尿失禁を主訴として外来を受診した中高年女性の尿失禁発症時期を調査するとともに、産褥一ヶ月健診を受診した褥婦を対象に妊娠分娩歴・尿失禁の発症時期とその程度などに関するアンケート調査を行い、妊娠分娩産褥と尿失禁との関連

につき検討した。尿失禁にて外来受診した中高年女性の過半数において、尿失禁は妊娠分娩時から持続しており、尿失禁の発症に妊娠分娩が強く関わっていることが示唆された。また、産褥一ヶ月健診時には22.8%に尿失禁を認め、その時期の尿失禁は経産回数や分娩方法と関連があると考えられた。また、産褥体操は尿失禁の治療に有効である可能性があり、リスクファクターを有する褥婦における産褥体操の重要性が示唆された。

今年度は、(1)思春期の障害が妊娠・分娩・産褥に及ぼす影響を明らかにするため産後1週間以内の褥婦に対し思春期障害に関するアンケート調査を行い、妊娠分娩経過との関連について検討した。思春期での急激な体重の変化を経験した場合には異常分娩の率が高く、産婦人科受診歴がある場合は出生時のアプガースコアが低いという結果が得られた。情緒不安定な性格は、妊娠・分娩に悪い影響を及ぼす反面、思春期での満たされた家庭・社会環境は、妊娠・分娩に好結果をもたらす可能性が示唆された。

さらに、月経異常・障害を主訴とした思春期外来受診者に対し、その後の妊娠分娩に関するアンケート調査を行った。思春期の無月経は必ずしも予後が不良ではなかった。流産率や異常妊娠率の発生頻度は、通常の結果と差がなかったが、不妊症治療後に妊娠する率が高いことが明らかとなった。

(2)成人病と妊娠分娩産褥及びその異常との関連を明らかにするため、妊娠分娩の既往のある腎透析患者に妊娠分娩に関するアンケート調査を行った。妊娠中毒症の既往が高率に認められ、純粋型中毒症群では中毒症既往なし群に比べて、最終出産から腎疾患診断までの期間が有意に短かった。妊娠中毒症の症状として蛋白尿のみを認めたものが純粋型中毒症群の40%を占め、一般の純粋型妊娠中毒症に占める頻度よりはるかに高率に認められた。子宮内胎児発育遅延児出産

がいずれの群でも、特に混合型中毒症既往群では高率に認められた。

成人病健診の検査結果と妊娠分娩産褥歴との関連を明らかにするため、成人病健診を受診した35-55才の女性に対し妊娠分娩産褥に関するアンケート調査を行った。心電図異常を示した群では異常を示さなかった群に比し妊娠分娩回数・流産回数が多く、経妊・経産婦のHDLは未妊婦に比し有意に低値を示した。妊娠中に高血圧が認められた群や産後1年間の間に体重が妊娠前の値まで低下しなかった群では現在の血圧・肥満指数が有意に高値を示し、HDLは有意に低値を示した。また低体重児出産例では、その後母体の体重は増加し、血圧は上昇する傾向が認められた。

(3) 中高年の好発疾患として本年度は腰痛症に注目し、妊娠分娩産褥との関連を検討するために、更年期外来受診患者に対し腰痛と妊娠分娩産褥歴に関するアンケート調査を行った。

腰痛の自覚が軽度のものでは、中等度・高度群に比し、妊娠分娩歴のない症例が多く認められた。現在腰痛を認めるものの60%は、妊娠・分娩時に腰痛を認め、自覚症状が高度なものの30%では、明らかに妊娠・分娩を契機として腰痛が発症していたことから、日常生活に支障のある程度の高度の腰痛症には、妊娠・分娩時の腰痛がその発症に関与している可能性が示唆された。

【見出し語】 妊娠・分娩・産褥、思春期障害、成人病、虚血性心疾患、腎透析、尿失禁、腰痛症、リスクファクター

【考察】 妊娠・分娩・産褥をキーワードとして、女性の生涯の健康について検討した研究は従来ほとんど行われていない。本研究は、女性の各ライフステージにおける健康管理を、その時点での健康状態のみならず、その後の生涯にわたる健康を視野におきながら考えて行こうとするものである。

思春期障害に関するアンケート調査はプライバシーに触れる部分が多いこと、思春期障害患者に対する追跡調査は転居などにより不可能となるケースが少なくないこと、などから回収率の不良が危惧されたが、産褥婦人からは127例、思春期外来受診者は55例から回答が得られた。思春期の月経異常に関しては、不妊症治療を要する頻度は高かったが、妊娠・分娩産褥に関しては大きな影響を残さなかった。しかしなが

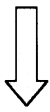
ら、急激な体重の変化や家庭社会環境が妊娠・分娩結果に影響をもたらす可能性があり、思春期における精神衛生面の重要性が示唆された。

一般に腎透析の原疾患としては、妊娠中毒症は0.5%を占めるに過ぎないが、妊娠分娩経験者においては中毒症既往が77.5%と高率に認められたことから、腎透析中の婦人には妊娠分娩歴がない場合が多いこと、また妊娠中毒症は腎疾患発症のリスクファクターである可能性が示唆された。特に蛋白尿を主徴とし高血圧を伴わない型の純粋型妊娠中毒症は、腎疾患が潜在している可能性があると考えられた。また妊娠中毒症既往がない場合でも子宮内胎児発育遅延の頻度が高く、昨年度の研究において虚血性心疾患罹患患者でも子宮内胎児発育遅延の頻度が高かった事と合わせて考えると、子宮内発育遅延児の出産は、将来の成人病発症に対するリスクファクターとして注目すべきであろう。

成人病に関するアンケート調査では、心電図異常群で妊娠・分娩・流産回数が多い傾向が得られ、妊娠・分娩が心疾患と何らかの関連を有することが示唆された。妊娠中の高血圧と共に、分娩後の体重回復状態が将来の高血圧や脂質代謝の異常と関連を持つことが示され、分娩後の体重管理が保健指導上重要であることが示唆された。また本調査においても、子宮内発育遅延児出産歴は、その後の高血圧や肥満傾向と関連があり、成人病発症に関連を有することが示唆された。

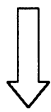
腰痛症については、高度なものの場合には妊娠分娩を契機に発症している場合が多く、妊娠分娩の際の腰痛発生に対し十分な対応を行うことにより、将来の重症腰痛症を予防できる可能性があることが示され、妊娠・分娩時の腰痛症に対する診断治療の重要性が示唆された。

アンケート調査は来年度も継続され、さらに新たに子宮脱と妊娠・分娩・産褥との関連に関する調査が開始される予定である。本研究で得られる結果は、思春期における健康管理、成人病発生予防のためのハイリスク妊産褥婦の検出、中高年好発疾患予防のための分娩・産褥管理など、女性の生涯にわたる健康管理プログラムの作成ために貴重な資料を提供するものと期待される。



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



【要約】妊娠・分娩・産褥における生理学的及び病理学的な身体上的変化は、女性の生涯にわたる健康と密接な関連を有することが様々な事実により推察される。本研究の目的は、妊娠・分娩の経験の有無や妊娠・分娩時にみられた異常が女性の各ライフステージにおける健康とどのような関連を有するかを解明することである。そこで、(1)思春期における各種障害、(2)虚血性心疾患・腎疾患を代表とする成人病、(3)尿失禁・腰痛症・子宮脱などの中高年期の好発疾患がそれぞれ妊娠・分娩・産褥とどのような関連を有するかをレトロスペクティブな視点から明らかにすることとした。

昨年度は(1)思春期障害と妊娠・分娩・産褥との関連を検討するため、産褥婦人を対象とした思春期障害に関するアンケート調査と、思春期外来患者を対象とした妊娠分娩産褥に関するアンケート調査を計画し、調査形式の設定及び質問用紙の作成を行った。(2)成人病と妊娠・分娩・産褥との関連を検討するため、二つの対象群、即ち、成人病を発症し入院治療を受けた女性患者と保健所において実施される成人病健診受診女性、とに対する妊娠分娩歴に関するアンケート調査を計画した。急性心筋梗塞にて入院治療した女性患者を対象としてアンケート調査を行い、急性心筋梗塞患者の産科合併症としては妊娠中毒症・流産・早産・巨大児等が認められ、特に子宮内胎児発育不全は高率であった。また、保健所で行われている成人病検査の実態を調査し、アンケート調査の対象とその様式に関する方針を決定し、アンケート用紙の作成を行った。(3)尿失禁と妊娠・分娩・産褥との関連を検討するために、腹圧性尿失禁を主訴として外来を受診した中高年女性の尿失禁発症時期を調査するとともに、産褥一ヶ月健診を受診した褥婦を対象に妊娠分娩歴・尿失禁の発症時期とその程度などに関するアンケート調査を行い、妊娠分娩産褥と尿失禁との関連につき検討した。尿失禁にて外来受診した中高年女性の過半数において、尿失禁は妊娠分娩時から持続しており、尿失禁の発症に妊娠分娩が強く関わっていることが示唆された。また、産褥一ヶ月健診時には22.8%に尿失禁を認め、その時期の尿失禁は経産回数や分娩方法と関連があると考えられた。また、産褥体操は尿失禁の治療に有効である可能性があり、リスクファクターを有する褥婦における産褥体操の重要性が示唆された。

今年度は、(1)思春期の障害が妊娠・分娩・産褥に及ぼす影響を明らかにするため産後1週間以内の褥婦に対し思春期障害に関するアンケート調査を行い、妊娠分娩経過との関連について検討した。思春期での急激な体重の変化を経験した場合には異常分娩の率が高く、産婦人科受診歴がある場合は出生時のアプガースコアが低いという結果が得られた。情緒不安定な性格は、妊娠・分娩に悪い影響を及ぼす反面、思春期での満たされた家庭・社会環境は、妊娠・分娩に好結果をもたらす可能性が示唆された。さらに、月経異常・障害を主訴とした思春期外来受診者に対し、その後の妊娠分娩に関するアンケート調査を行った。思春期の無月経は必ずしも予後が不良ではなかった。流産率や異常妊娠率の発生

頻度は、通常の成績と差がなかったが、不妊症治療後に妊娠する率が高いことが明らかとなった。。 (2)成人病と妊娠分娩産褥及びその異常との関連を明らかにするため、妊娠分娩の既往のある腎透析患者に妊娠分娩に関するアンケート調査を行った。妊娠中毒症の既往が高率に認められ、純粹型中毒症群では中毒症既往なし群に比べて、最終出産から腎疾患診断までの期間が有意に短かった。妊娠中毒症の症状として蛋白尿のみを認めたものが純粹型中毒症群の 40%を占め、一般の純粹型妊娠中毒症に占める頻度よりはるかに高率に認められた。子宮内胎児発育遅延児出産がいずれの群でも、特に混合型中毒症既往群では高率に認められた。

成人病健診の検査結果と妊娠分娩産褥歴との関連を明らかにするため、成人病健診を受診した 35-55 才の女性に対し妊娠分娩産褥に関するアンケート調査を行った。心電図異常を示した群では異常を示さなかった群に比し妊娠分娩回数・流産回数が多く、経妊・経産婦の HDL は未妊婦に比し有意に低値を示した。妊娠中に高血圧が認められた群や産後 1 年間の間に体重が妊娠前の値まで低下しなかった群では現在の血圧・肥満指数が有意に高値を示し、HDL は有意に低値を示した。また低体重児出産例では、その後母体の体重は増加し、血圧は上昇する傾向が認められた。 (3)中高年の好発疾患として本年度は腰痛症に注目し、妊娠分娩産褥との関連を検討するために、更年期外来受診患者に対し腰痛と妊娠分娩産褥歴に関するアンケート調査を行った。

腰痛の自覚が軽度のものでは、中等度・高度群に比し、妊娠分娩歴のない症例が多く認められた。現在腰痛を認めるものの 60%は、妊娠・分娩時に腰痛を認め、自覚症状が高度なもの 30%では、明らかに妊娠・分娩を契機として腰痛が発症していたことから、日常生活に支障のある程度の高度の腰痛症には、妊娠・分娩時の腰痛がその発症に関与している可能性が示唆された。